2016年6月1日発行　　通巻165号

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西2-9-3　Tel:042(554)1710　Fax:042(554)5562　www.bibleseminary.jp　振替00150-6-34971

巻頭言
「心はうちに燃えて」

（流山福音自由教会牧師、聖書神学舎講師）宗形　和平

「そこでふたりは話し合った。『道々お話しになっている間も、聖書を説明してくださった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。』」（ルカの福音書24章31節）

牧会で、また聖書神学舎で教えることにおいて、上記のみことばのような経験を共にさせていただくことを願いとしています。信仰を持っていても、いえ、むしろ信仰を持っているからこそ戸惑い、悩み、行き詰まることがあります。けれど不思議な、時にかなってふさわしいとしか言いようのないみことばによる気づきが与えられ、「ああ、そういうことだったのですね」と口にする経験をさせていただきます。それはキリスト者にとって最高の喜びとなることでしょう。研修生の聖書宣教会での生活が、神様の御前に静まり、砕かれ、みことばを自分の考えに引き寄せることなく、わかってしまったと決め付けることもなく、絶えず教えられることを喜びとする学びの時であるようにと願っています。

エルサレムから十数キロ離れたエマオ村へ、十字架とよみがえりの出来事を話し合いながら向かうふたりの弟子にイエス様が近づき、一緒に歩んでくださいました(13-15節)。ところが「どなたであるのか」、すぐ近くにおられるというのに「わからなかった」とあります（16節)。主が近くにおられるのに気づかない…まるで自分の姿を見せられているようです。けれど、そのような二人にイエス様は、「聖書全体」から「ご自分について書いてある事がら」を説き明かしてくださいました（27節)。慰めを覚えます。そして「聖書全体」からというみことばが心に響きます。このことが私たちの信仰に、健全さを保たせてくれることでしょう。

やがてイエス様の姿が見えなくなった時に、ふたりが話し合ったのが上記のみことばでした。「心はうちに燃えていた」…それは後になって気づくような穏やかな燃え方であり、穏やかだけれど確かな平安と新しい力と希望とをもたらしてくれる燃え方でした。これもまた、ご聖霊によってみことばが説き明かされる時、私たちにも与えられる喜びの体験となります。

ユダヤの民は、「やがて救い主が来られる」ということを、希望の拠り所としていました。イエス様がなさった様々な奇跡のわざに、「この人は、ダビデの子なのだろうか(12章23節)」という理解も見せ始めています。けれどイエス様に付き従った弟子たちでさえ、イザヤ書53章のような「苦難のしもべ」の姿や、詩篇22篇の十字架の上のことばに、聖書が示していた救い主の姿を見出すことは、ご聖霊の働きがなければできないことでした。「預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち（25節)」という警告と、「キリストは、必ず…苦しみを受けて、それから、彼の栄光に入るはずではなかったのですか（26節)」というイエス様のおことばからは、重ねてみことばの全体を丁寧に読む大切さと、わかってしまったと言うことなく、ご聖霊の助けによって教えられ続けることの大切さが示されます。

イエス・キリストが十字架の死と復活を通して永遠のいのちへの道を開いてくださいました。そしてご聖霊を通して私たちのうちに住み、共に悩み、共に苦しみ、共に歩んでくださいます。宣教会での学びで、イエス様の愛と恵みが染みわたり、そのお姿とみこころとに驚き、伝えずにはおられない熱情が、静かに、けれど力強く燃え上がるものであるようにと願います。そしてイエス・キリストのみからだなる教会において、この喜びを分かち合う働きにあずからせていただけますように。

聖書神学舎から

聖書神学舎 教師・研修生活主任　赤坂　泉

聖書宣教会・聖書神学舎の働きを覚えて、お祈り、お支えいただき、ありがとうございます。主と主の教会に支えられて、3 月には 3 名の本科卒業生を四国と都区内と羽村（!?）とに、特別研修コースを修了した 1 名を熊本に送り出しました。主に感謝します。また、2015 年度の財政の必要もちょうど必要な分だけが与えられて決算ができました。主の御名をあがめます。

新年度は、4 月 5 日の入会式で本科 5 名、聖書科 1 名の研修生が加えられて、私たちの歩みを始めました。その矢先、熊本地震が発生し、祈りと情報収集に集中しました。熊本市内で牧会奉仕をしている卒業生、県内、近隣の卒業生や関係の同労者の無事が確認できましたが、諸教会や地域の被害は甚大です。その後の展開も含めて未経験の事態に戸惑いながら、研修生、教職員のほんの数人ですが、現地で奉仕してきました。今後のためになお祈らされています。

●研修生近況

研修生は、学びや教会奉仕に全力を傾けながら、春は、神学校親善ソフトボール大会にも注力するのが常です。他神学校で主に仕えている兄姉との交わりの好機で、今年も 5 月 16 日に幸いな一日が与えられました。

季節を問わず、寮生活は、豊かな、深い交わりの場です。単身寮には日常の多くを共有する賑やかな交わりがあります。男子寮に 10 名、女子寮に 3 名のほか、折々に宿泊利用する聴講生もあります。家族寮では、新婚さん、5 月に第三子の誕生を祝った家族、歴年の歩みの味わいを見せる夫婦など、多様な家庭が助け合っています。上記の「羽村（!?）」にというのは、卒業、結婚、夫君の入会という事情で家族寮に引っ越した次第です。

夏に向かって、それぞれの学年が交わりを深め、学びと訓練を重ねます。並行して、1、2 年生はキャラバン伝道の準備にも心を用いています。今年は、大間々キリスト教会（群馬･福伝）、みらい平キリスト教会（茨城･JECA 開拓）、奈良福音自由教会（奈良）、ともしび聖書チャペル（熊本・バイブルプロテスタント）の 4 教会で受け入れていただきます。お祈りください。奉仕と訓練の様子は次号の宣教会通信で報告させていただきます。

●夏に向けて

学びを深めているのは教師たちも同様で、日常の働きに加えて、夏期研修講座に向けて、4、5、6 月と毎月の研究会で学びを励まし合っています。「聖書信仰」の理解を整理して、みことばに仕える者たちの営為が無用の混乱から守られ、一層力強いものとなるための助けとなることを願っています。（既報のように、この講座期間中に聖書研究ソフトウエア Accordance の活用セミナーも提供されます。7 月 14 日には一般向けのセミナーがお茶の水クリスチャンセンターで提供されます。）

教会音楽夏期講習会の準備も進んでいます。「みことばと音楽～礼拝～」をテーマに提供される学びの機会が、諸奉仕者を整えて、諸教会の礼拝をいよいよ整えることに用いられますように。

いずれも締切間近です。ウエブサイトで詳細をご確認ください。

●お祈りください

研修生の学びと訓練が、主のみこころに即してなされるように。奉仕教会で、遣わされる宣教の現場で、良く主に仕える者たちであるように。

教職員のためにも支えをお祈りください。がんとの闘いがあり、他の試みもあります。健全な霊肉をもって主に仕えることができるように。夏の諸奉仕、上記の講座、講習会をはじめ、各教会や団体等での働きが、主の栄光のために用いられるように。また、聖書翻訳に参与している者たちに、主の特別な守りと支えがあるように。

世代交替のためにもお祈りくださることを感謝します。専任教師が導かれるように、講師陣が十分に与えられるように。

諸教会、兄姉皆様にも、主の恵みが豊かにあらわされますようお祈りします。夏のさまざまな計画を主が祝して、主の栄光のためにお用いくださいますように。

国政選挙を覚えて、為政者のために祈らされます。「敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごす」（1 テモテ 2:2）ことができるように、日本のため、世界のために祈ります。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 2016年度　新入会生 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

左より：阿部、岩﨑、杉本、藤本、山下、丸毛

氏　名	出身教会		奉仕教会
（聖書神学舎本科）［５名］			
阿部真知子	日本福音キリスト教会連合	前橋キリスト教会	前橋キリスト教会
岩﨑亙太郎	日本福音キリスト教会連合	川越聖書教会／東洋ローア・キリスト伝道教会	川越聖書教会
杉本　信	日本長老教会	東大和刈穂キリスト教会	東大和刈穂キリスト教会
藤本仕光	日本福音キリスト教会連合	八王子キリスト福音教会	八王子キリスト福音教会
山下　亮	日本同盟基督教団	石神井福音教会	石神井福音教会
（聖書神学舎聖書科）［１名］			
［聖書専攻］			
丸毛　雄	単　立	高崎キリストチャペル	相原キリスト集会

もっと聖書に聞きたい！

杉本　信

中学2年生の頃（十余年前）に召しをいただいて以来、念願だった神学校での学びを始められたことを、主に感謝します。

神様は私の人生を導くために、幾度も聖書を通じて語ってくださいました。宣教の働きに加わる召しを受けたとき、キリストが罪人である私のために死なれたことを本当に理解したとき、人生の様々な場面において神様からの語りかけがありました。

主のみことばは私を励まし、落ち込む私に慰めを与え、また御心に従うようにと私を突き動かしました（従いきれない弱さを抱える者ではありますが）。さらに主の語りかけに聞いていく者と成長できるよう、聖書神学舎で学ぶ機会が与えられていることは、本当に幸せなことです。

やがては日本長老教会に属する教会の牧師になり、主のみことばを大胆に伝える者となりたいと願っています。そのためにも精一杯学びに励んでいきたいです。

主の栄光と集会のために

丸毛　雄

中学生の時、不思議な導きでクリスチャンたちと出会い、高校生の時に受洗し、高崎キリストチャペル（下小鳥キリスト集会）での信仰生活を始めることができました。

その後、集会での様々な学びや交わり、奉仕、学校での聖書研究会を通して、神様を知ることや伝道する喜びを味わいました。同時に、自分の誤った聖書理解や人格的未熟さの故に、つまずきを与えてしまったこともあり、もっと聖書を学び、成長したいという願いが与えられ、神学校での学びを祈るようになりました。

特に、礼拝で救いの確信と献身への思いが強められました。毎週の礼拝説教では、主の恵みのみことばに圧倒されていました。そして、このお方のため、また集会のために訓練を受けたいとの志が与えられ、長老たちとの祈りと相談の内に、この度、聖書科に導かれました。

主の御栄光のため、また集会の益となれるように、祈りつつ学びに励みたく思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　2015年度　卒業生　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

左より：田中、山下、小幡

氏　　名	奉　仕　先
（聖書神学舎本科卒業）［３名］	
小幡（おばた）　塁（るい）オリバー	永福南キリスト教会　日本福音キリスト教会連合
田中（たなか）　秀亮（ひであき）	八栗キリスト教会　日本福音キリスト教会連合
山下（やました）（旧姓末吉（すえよし））　文（ふみ）	

福音のために知識を用いる

小幡　塁オリバー

大学時代に救われ、漠然とフルタイムで主に仕えることを考え始めました。それから何年も経ち、献身に導かれ、神学校で学ぶ機会が与えられました。学ぶのは好きだったので、神学の学びは知的好奇心を満たしてくれるものでした。しかし、同時に私の聖書に対する向き合い方が分析的で命のないものになっていったように感じます。

そんな中、奉仕教会で、大きな痛みを背負い生きている何人かの方々と出会いました。そういう方たちの苦悩を目の当たりにし、人が求めているのは、小手先の神学や聖書釈義ではなく、「救い」なのだと気付かされました。やはり人間には、キリストの福音しか希望はない。このような確信を得て、ようやく原点に戻れたような気がしました。もちろん福音を正しく伝えるために、聖書釈義や神学が必要なのは言うまでもありません。神学舎で学んだ知識が福音に取って代わるのではなく、より輝かせるために用いたいと願っています。

支えてくださった方たちに感謝しつつ。

召しの再確認

田中　秀亮

入会前に、私は学生伝道（KGK）の主事として6年間働きました。宣教会に入会した頃、私は、伝道者としての召しがぐらついていました。その当時の私にはそれが一番の問題に見えました。徐々に、私は自らの礼拝者としてのあり方こそ問題であると気づいていきました。奉仕教会での時間、宣教会での時間を通して、神を恐れる心、みことばに素直に聞く心、神を礼拝する者としての自分自身を私は取り戻していきました。恥ずかしい話ですが、神学校に入りながら、礼拝者としての自分自身を建て直すことから私は始めていかなければなりませんでした。学年が上がり、徐々に卒業後の進路を考えるようになり、自分が召された時のことを振り返るようになりました。私がKGKの主事として働くことを打診され不安の中にあったとき、主はみことばをもって励ましてくださいました。そして、私が献身の歩みを踏み出す決断をしたことを思い出しました。私はすでに召されていたのです。主は4年間を通して私にこのことを気づかせてくださいました。

取るに足りない者、主のはしため

末吉　文

「地の塵に等しかり　何一つ取り柄なし
今あるはただ主の愛に生くる我ぞ
み救いを受けし罪人に過ぎず
されど我　人に伝えん　恵み深きイエスを」
聖歌522番

この曲は、いつしか研修生活の愛唱歌となりました。「この世の取るに足りない者…を、神は選ばれました。」（Ⅰコリ1:28）という、献身する時に強く思わされたみことばを、歌う度に思い起こさせられるからです。

高校生の時に救われ、看護師として勤めた後、献身に導かれ、3年間の幸いな学びの時を過ごしました。この小さな者に、みことばの学び、奉仕、交わりと、恵みに次ぐ恵みが与えられ、ただただ感謝しています。卒業後すぐ結婚するという思いがけない導きも与えられました。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」（ルカ1:38）という祈りを今日も祈りつつ、恵み深きイエスを更に深く知り、このお方をお伝えしていきたいと願っています。

「聖書は誤りなき神のことば」
～シカゴ声明再考～（その３）

聖書宣教会 校長　鞭木　由行

今回でこの声明文の再考は最終回となります。最後はこの声明の核心部分である無謬性と無誤性についてです。声明は以下のようになっています。

第11項（無謬性あるいは不可謬性）

「聖書は神の霊感によって与えられたので、不可謬であり、その結果として私たちを誤ちに導くことはなく、その語るすべてのことにおいて、真であり、信頼できるということを私たちは主張する。」

「聖書がその主張することについて不可謬であると同時に誤りをもつことがありうるということを私たちは否定する。不可謬性と無誤性は区別してもよいであろうが、分離することはできない。」

この第11項は、聖書の無謬性（あるいは不可謬性；ここでは無謬性で統一する）に関する直接的な主張となっています。無謬性とは、神の霊感の結果、聖書が語るすべての事柄が真実で、信頼できることを意味しています。そのような真実性と信頼性のゆえに、聖書は私たちを誤って導くことはない、つまり無謬性を持っているのです。無謬性とは誤って導かない聖書の性質です。このように第11項においては、無謬性は肯定的に定義されています。それもまた聖書の重要な側面であるからです。そして、おおよそ聖書を神のことばと告白する福音派諸教会の中に、無謬性を否定する人は誰もいないでしょう。もし無謬性を信じることができないのであれば、聖書は信頼できない書物だと公言しているのであり、キリスト教信仰そのものが土台を失ってしまいます。ですから無謬性自体について問題はありませんでした。

ただ、この第11項で議論となるのは、むしろ否定条項の方です。問題は、そのような聖書の真実性や信頼性（無謬性）を認めながら、なお聖書には誤りがありうると考えることができるかどうかということです。そうできると考える人々に対して、この条項は、はっきりと両者を分離することはできない、と反論しています。理論上、無謬性と無誤性を区別することはできても、実際上、両者を分離して無謬性だけ認めるということはできません。なぜなら、無謬性とは可能性の問題であり、他方で無誤性は現実の問題だからです。ですから無謬性という可能性をもっているものが、無誤という現実を持つことは可能であっても、無誤という現実が、誤って導く可能性があるというのは、理論的にも実際的にもあり得ないからです。無謬性と無誤性を分離できるという考え方は、自己撞着しています。「誤った記述があっても誤って導くことはない」とか「誤った記述があっても信頼できる」ということは矛盾です。現代の論争において、一部の福音派の人々が、無謬性と無誤性が分離しうると考えたのはおかしなことでした。無誤性は、もともと無謬性のなかに含まれていたのであり、その意味で現代は「無誤謬性」を用いるのが一番安全です。

第12項（無誤性）

「聖書はその全体において無誤であり、いつわりや虚偽や欺きが一切ないことを私たちは主張する。」

「聖書が不可謬であり無誤であるのは、霊的な、宗教的な、あるいは救済的な主題に限られたことであって、歴史や科学の分野においての主張は、その限りでないということを私たちは否定する。

私たちはさらに地球の歴史に関する科学的仮説が創造や洪水に関する聖書の教えを超克するために用いられるのは正当でありうるということを否定する。」

第12項は、いよいよこの声明文の核心部

分である聖書の無誤性の主張です。聖書の無誤性とは、否定的に定義するなら「いつわりや虚偽や欺きが一切ないこと」です。続く否定条項ではこのような無誤性が、無謬性とともに聖書全体に及ぶことを具体的に主張しています。つまり無誤性は、ある特定の分野、つまり霊的宗教的道徳的分野、あるいは救いに関する分野だけに限定されず、歴史や科学の領域までも含んで無誤であるということです。無誤性の範囲をこのように聖書全体に及ぶと主張した背景には、聖書は事実を忠実に記述することを目指す、通常の歴史書ではなく、神の救いのご計画に重点を置く歴史書であるので救いに関しては誤りがなくても、歴史的客観的出来事の記述においては正確性を欠くところがあるというような主張があるからです。しかし、実際問題として、歴史的事実の記述と霊的宗教的真理の記述を分離することは不可能です。それは聖書自身が真理を歴史的に提示しているという性格があるからです。聖書は決して抽象的な言葉で真理を提示したのではなく、特定の時間と空間のなかで、真理を記述しました。それゆえに、それは解釈に翻弄されず、永遠の命題的真理を提示し得たのです。

それにもかかわらず、このような定義を必要とした背後には、歴史批評学から指摘されてきた様々な諸問題があります。ここで理解を深めるために少し具体的問題に言及したいと思います。歴史的問題で古くから指摘されてきたのは、サムエル記・列王記と歴代誌の並行記事における矛盾です。それらについては、すでに様々な解決が提案されてきましたが、私にとってアハズヤの最期を記録した第2列王記9章27節と第2歴代誌22章9節とは今もパズルのような箇所です。前者はアハズヤの最期をこう述べています。「ユダの王アハズヤはこれを見ると、ベテ・ハガンの道へ逃げた。エフーはそのあとを追いかけて、『あいつも打ち取れ』と叫んだので、彼らはイブレアムのそばのグルの坂道で、車の上の彼に傷を負わせた。それでも彼はメギドに逃げたが、そこで死んだ。」同様の出来事は、歴代誌では次のようになっています。「彼がアハズヤを捜したので、人々は彼を捕らえた。彼はサマリヤに身を隠していたのである。こうして、人々は、彼をエフーのもとに引いて来て殺したが、これは心を尽くして**主**を求めたヨシャパテの子であると言って、彼を葬った。アハズヤの家は王国を治める力を失った。」

これらは調和的に理解することが困難であることは認めざるを得ませんが、それを誤りと考える必要はありません。おそらく理解するために十分な資料が私たちには伝えられていないのです。それを現代的な意味ですぐ誤りと断定してしまうことは賢明とは言えません。なぜなら歴代誌の著者がこのようにアハズヤの最期を描いたとき、著者は列王記の記述をよく知っており、それにも関わらず、それを矛盾とは考えずに、自分の資料に従って記述したからです。ですから、これは誤りと言えることではなかったはずです。

また数字もやっかいな問題であることは確かです。ほんの一例を挙げれば、イスラエル人がエジプトに滞在していた年数について、創世記15章13節と使徒の働き7章6節では「400年」と言われ、出エジプト記12章40節とガラテヤ3章17節では「430年」と言われています。聖書外資料ではもっと短い数字もあります。この場合400年が概数であったと思われます。通常は端数まで記されている方が文字通りの年数である傾向があります。ただ数字の問題は聖書の中で最も困難な問題のひとつです。しかし、今日の私たちに納得のできない数字があっても、これを直ちに誤りと見なすべきではないでしょう。創世記の系図に現れるような、何百歳というような年齢を考えれば、当時の古代オリエント世界には、今日とは違った「数の概念」というものがあり、それに従っただけなのかも知れません。

この声明は、二番目の否定条項として科学的仮説を取り上げています。地球誕生や人間の起源についての科学的「仮説」が、あたかも立証された真理であるかのように見なされ、それによって、アダムの歴史性やノアの洪水などを否定する問題です。しかし、聖書は地球の起源について語ってい

ます。このことは科学的仮説や科学的研究が無意味であると言うことを意味しているわけではありません。過去において教会は科学的知識に助けられ、聖書の誤った解釈（例えば天動説など）から助けられたことがありました。それは聖書が誤っていたのではなく聖書の解釈が誤っていたのです。しかし、まだ仮説の段階に過ぎない諸説が、創造や洪水に関する聖書の教えを超克するために用いられるのは正当ではありえません。

第15項（霊感と無誤性）

「無誤の教理は、聖書が霊感について教えていることに基づいていることを私たちは主張する。」

「イエスの聖書についての教えを、人間の状態に適応させたためであるとか、イエスの人間としてもっていた制約のためであるとかすることによって、処理することができるということを私たちは否定する。」

さて、この声明文は、無誤性の主張に当たって根本的問題は聖書の霊感をどのように考えるかという点にあることを主張して終わっています。確かに無誤性の根底にあるのは聖書の霊感です。無誤性は、どのような霊感説に立つかということにかかっています。神の霊感が「ことば」にまで及んでいたという言語霊感説に立つのであれば、聖書の無誤性は必然的なものでしょう。もし無誤性を否定し、無謬性だけを認めるというのであれば、その人はどのような霊感説に立っているのかを明らかにする必要があります。聖書から霊感を考えて行くとき、聖書が言語霊感を主張していることは、旧約にも新約にも溢れるほど確かなことです。

例えば、旧約聖書の著者たちは、神が彼らの口に言葉を授けていることを自覚していました。「わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることをみな、彼らに告げる。」（申命18:18）またエレミヤ書1章9節でも「そのとき、**主**は御手を伸ばして、私の口に触れ、**主**は私に仰せられた。『今、わたしのことばをあなたの口に授けた。』」それゆえ預言者たちが用いた導入句は「主はこう仰せられる」（エレミヤ5:14）であり、また「主のことばが私にあった」であり、「主の御告げ」（268回）でした。また彼らが書き残した預言書全体に「主のことば」というタイトルを付けたのです（ヨエル1:1、ホセア1:1等）。

また新約聖書では、主イエスも（マタイ5:18、ヨハネ10:35）、パウロも（2テモテ3:16）、ペテロも（2ペテロ1:20－21）、みな等しく言語霊感を主張しています。パウロは自分が語るとき、自分を通してキリストが生き生きと語っていることを深く確信していました（2コリント13:3）。そこで「命じるのは私ではなく主です」（1コリ7:10）とさえ言うことができたのです。これらは聖書の言語霊感についてほんのわずかな例ですが、聖書の言語霊感を疑う理由は微塵もありません。そのように言葉が神の息吹によって生み出されたのであれば、私たちは、神のことばが無誤であることを認めないわけにはいきません。

第15項目の否定条項は、無誤性を考える上で、決して忘れられてはならないことです。それは、主イエスの聖書についての見解が私たちの見解でなければならないということです。主イエスは、聖書の霊感と無誤性をはっきりと認めました。それは誰も否定し得ない事実です。しかし、それでも主の聖書観を認めたくない人々は、主の聖書観は一種の「適応」であったと主張します。つまり、当時の人々が理解しやすいように主イエスが、一種の譲歩をして、当時の人々に合わせた（適応した）聖書観を語ったという主張です。

あるいは、主イエスは受肉したがゆえに、主の人間性には限界があり、主イエスは当時1世紀のユダヤ人が聖書について考えていたことをそのまま受け入れていたにすぎないという主張です。しかし、そのような主の「無知」を私たちが認めるのであれば、キリスト教真理全体が危機的状況に陥ります。主イエスこそは至高の権威です。そこからすべては出発すべきです。なぜなら、私たちは主イエスを**主**と信じているからで

す。その主イエスが誤ちを犯したのであれば、私たちはすべての拠り所を失ってしまうことになります。

こういうわけで、聖書のすべての教理はキリスト論に関する教理と結びついています。主イエスの高い聖書観が、私たちの聖書観の拠り所です。主イエスが天的事柄、救いや贖いを教えた時には、主イエスのことばを信じるが、その他の分野については主イエスのことばを信じないということはあり得ないことです。しかし、そのような理解が今日の福音派諸教会に忍び込んでいることについて、私たちは注意深くなければならないでしょう。次のような主の警告を覚えたいと思います。

「あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。」（ヨハネ3:12）

主のあわれみに感謝

2015年度収支決算概要
2016年度収支予算概要

単位／千円

収入の部	2015年度予算	2015年度決算	2016年度予算
維持献金	31,000	29,359	30,500
指定献金(研修生)	22,300	23,113	24,400
特別指定献金	5,750	11,023	5,750
その他収入	5,782	7,923	5,912
収入の部合計	**64,832**	**71,418**	**66,562**
支出の部			
活動費	5,975	5,414	5,975
管理費	10,600	10,725	12,303
人件費	37,130	36,745	36,854
諸準備金繰入	5,750	11,023	5,750
その他支出	5,377	7,459	5,680
支出の部合計	**64,832**	**71,366**	**66,562**
収支差額	**0**	**52**	**0**

主の御名をあがめます。

2015年度も、日々主にある皆様方の温かいお祈りと献金のお支えをいただき心より感謝申し上げます。

期中に収支バランスがマイナスとなり祈らされましたが、年度末までに不思議なように必要が満たされ僅かですが黒字となり主の御名をあがめました。また、特別指定献金の90％は奨学金指定献金でしたので新年度の予算も昨年に準じた額とさせていただきました。

以上感謝をもって報告させていただきます。

（聖書宣教会財務）

＜＜夏の講座と講習会ほか＞＞

	期　日	会　場
夏期研修講座「聖書信仰」	7月11日～13日	奥多摩福音の家
教会音楽夏期講習会「みことばと音楽～礼拝～」	7月27日～29日	聖書宣教会
（協力）Accordance活用セミナー	7月14日	お茶の水クリスチャン・センター

編集後記

諸教会のお祈りとお支えのなかで、この地にある主のわざが守られています。主に感謝し、御名をほめたたえます。諸教会、諸兄姉のうえにも主の恵みが豊かに注がれて、この混迷の時代に、堅く立って主のわざに励まれますように、そうして主の栄光のために力強く歩まれますように、祝福をお祈りいたします。（A）

発行者　岸本　　紘　　http://www.bibleseminary.jp/　　編集者　赤坂　　泉